

自分だけの時計

2023. 6. 17

劇団四季の浅利慶太氏は、オーディションのときに、「10年間辛抱できますか」と質問するそうである。すると、誰もが「できます」と答える。しかし、実際は1年以内に多くの子が辞めていく。俳優とは、人それぞれで伸びるテンポが違うため、自分だけの時計を持たないといけない。そう浅利氏は言っている。また、こうも言っている。

ところが、「私はなぜあの人のようになれないのだろう」と、ついつい他人の時計をのぞいて、自分を見失ってしまう。逆に、不器用でも10年から15年やっていると、自然にテクニックが身に付いて上手くなっていく。二枚目でなく声もいまひとつで、身体能力も高くなくて、あるのは根性だけという子でも、十年地道にやると結構いいバイプレーヤーになる。しかも器用でない分苦勞し、人格的に深みが出てくる。訓練に耐える力も、じっと待つことができる力も、芝居を愛し続ける資質もすべて才能である。

劇団俳優と教員は違う。教員にも「自分だけの時計」は必要だが、あまりゆっくりもしてられない。相手が子どもたちだからである。年齢にかかわらず、わかりやすい授業をしてもらったほうがいいだろう。

今の教育界は、50代が主力である。それも50代後半が多い。子どもたちからすると、若い先生のほうがよく、ベテランには魅力がないのかということ、そうでもない。年齢は関係ないようである。教員の場合、俳優ほどは、他人の時計をのぞくということはないのだろうと思う。不器用というわけではないが、経験を重ねるごとに味わいが出てきて、教員における名バイプレーヤーが多いように感じる。人格的に優れた方も多い。それだけ、苦勞もしてきているのだろう。

今の学校には、スーパースターも、二枚目もいないように思う。かえって、いぶし銀のような存在が求められているのかもしれない。大事なことは、名バイプレーヤーが、その持ち味を発揮できるような環境を整えることである。若手は、バイプレーヤーの姿から、多くのことを学ぶはずである。それでいい。

今までは、教職に就いてからの3年間で勝負だという話をしてきた。3年間で伸びていく角度が決まるからである。その一方で、5年目から10年目の先生方には、「自分だけの時計」の話をしたい。焦らず、じっくりと、地道に取り組むことの大切さを説きたい。そして、味のある、魅力的な教員になってほしいことを伝えたい。劇団ではないが、学校は、名バイプレーヤーを育てられる場所でありたい。